The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語におけるベネファクティブの記述的研究
Author(s)	山田, 敏弘
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42004
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【9】

氏　　名	山田敏弘（やまだ　としひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　15102　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	**日本語におけるベネファクティブの記述的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　工藤真由美 （副査） 教　授　土岐　哲　　助教授　石井　正彦

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語におけるテヤル、テクレル、テモラウ、およびその待遇的バリエーションであるテアゲル、テサシアゲル、テクダサル、テイタダクという3系列7形式群をベネファクティブと呼び、ひとつの範疇をなすものとしてまとめて捉えた上で、その意味・用法を考察・記述したものである。3部よりなり、第1部ではベネファクティブの構文的な特徴を記述し、第2部では参与者追跡機能を考察し、第3部では世界の諸言語の中での日本語のベネファクティブの特徴を捉える。

第1部の第1章では、研究全体の前提として、ベネファクティブの3系列の対立が、話者からのあるいは話者への動作・行為の方向性という性質に、動作主・被動作者の文法関係の選択というヴォイス的性質を十字分類的に掛け合わせた結果生じるものであることを述べる。第2章では、ベネファクティブ構文に含まれる事態の制限に関する記述を行ない、テヤル、テモラウ受益文では従属節内で主文末ほどの非自己制御的な事態に対する制限が強くないことを指摘する。第3章では、ベネファクティブ構文に含まれる名詞句の格表示に関して、アンケート調査による結果を分析し、テヤル、テクレル受益文における受益者のニ格表示の可否が段階的であること、テモラウ受益文の与益者がカラ格で表示しにくい場合があることを指摘する。第4章では、テモラウの使役・受身両面の性質を特徴付ける要因を示すとともに、「〜てもらっては困る」などに見られるテモラウが現場依存性の高い表現形式であることを指摘する。第5章では、使役および受身というヴォイス形式、テイルに代表されるアスペクト形式を中心に、ベネファクティブとの組合せの可否を検討することによって、述部におけるベネファクティブの位置付けを考察する。第6章では、話者からの遠心的な方向性という特徴を援用した意志表出的なテヤルとテクレルについて、聞き手存在の有無、テンス分化の可否、人称制限などの観点からモダリティ性を論じ、「えらくなってやる！」のようなテヤルが極めてモダリティ性の高い表現であることを示している。第7章では、依頼表現として用いられるベネファクティブを含む様々な形式を、その構成要素によって分類し特徴を記述する。

第2部では、第1部での考察を発展させて、動作・行為を話者との絶対的位置関係によって示すというベネファクティブの特性を利用した方略としての参与者追跡機能に対する試論を展開している。参与者追跡機能とは、談話参与者について同一指示であることを正しく追跡するために、話者が施す方策のことで、これによって聞き手が正しく談話参与者を追跡していくことが可能になるとする。第8章では、連文について、第9章では、南不二男の分類でいうB類以上の従属節を含む複文について、特に複数の有情参与者が含まれる場合に、ベネファクティブが、省略された

談話参与者を追跡する機能の一部を負っていることを論じている。第10章では応用として、連体修飾節における主名詞の同定に対してもベネファクティブの使用が有効であることを示す。

第3部では、日本語のベネファクティブの諸特徴を汎言語的観点から再検討するために、世界の30あまりの言語における類似した表現との比較を行ない、日本語のような3項対立をもつ言語は稀な存在であり、この特徴によって日本語では頻繁な名詞句省略が可能になっていると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、テヤル（アゲル、サシアゲル）、テクレル（クダサル）、テモラウ（イタダク）という3系列7形式群について、これまでの諸成果を踏まえて、現時点で最も包括的かつ詳細に記述したものである。また、第2部の参与者追跡機能の具体的な分析は、本論文のオリジナルな点であり、興味深い指摘が随所になされている。日本語では省略が頻繁に起こると言われるが、ベネファクティブ形式の豊富さもこの要因の1つになっているとの指摘は、今後の研究に大いなる刺激を与えることであろう。

しかしながら、本論文ではせっかくベネファクティブという新たな用語を提示しながら、その本質的特徴づけは十分なものではない。非典型的な文法的カテゴリーであるというだけでは、従来の研究との違いが見えないばかりでなく、文法的カテゴリーの問題を曖昧なものにしてしまう危険性をはらんでいる。また、文学作品等からの実例採集、アンケート調査、内省を使って分析を進めているが、この3つをどのような基準のもとに利用したりしなかったりしたのかはっきりせず、文法性判断がやや恣意的であるとの印象は否めない。動詞等の分類を含めて、分析結果が十分説得的なものにはなっていない点が惜しまれる。また、世界の30あまりの言語におけるベネファクティブに類似した表現の調査は、やや表面的であり、今後の課題としてより深い分析が望まれよう。

以上、問題点は含んでいるが、世界の諸言語の中に日本語をおいて、ベネファクティブの構文的特徴を網羅的に記述し、複文、連文レベルにおける参与者追跡機能を新たに提起した本論文の意義は認められるべきであろう。

よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。